

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2013年7月 NO.174

[もくじ]

- 2～3 土佐の俗信と妖怪…常光徹
- 4～5 山のこころ…John Moore
- 6～7 ニューヨークで個展を経験して…岡本明才
- 8～9 84プロジェクトの取り組み…川村聡志
- 10～11 言葉の現場から40「レ・ミゼラブル」のなぞ…広井護
- 12～13 高知市文化振興事業団4月～6月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「通学路」中村衿樺

公益財団法人高知市文化振興事業団

土佐の俗信と妖怪

常光 徹

「夜、爪を切つてはいけない」「カラス鳴きがわるいと不幸がある」「北枕で寝るな」といった身近な言い伝えを俗信という。平生は気に留めていないようでも、いざとなると意外に気にかかることがある。俗信は、身近な生活の1コマをすくいととりながら、比較的短い言葉で表現される内容が大部分を占めていて、日常の具体的な場面で影響を及ぼしていることが少なくない。

俗信研究の道を拓いたのは柳田国男（一八七五年～一九六二年）である。柳田は、ものの見方や感じ方、心のくせ、恐怖感や幸福感など、人びとの心意を明らかにする手がかりとして俗信を重視した土佐民俗学会の会長をつとめられ

た桂井和雄（一九〇七年～一九八九年）は、俗信研究の第一人者として学界をリードしてきた一人である。桂井の業績は、『桂井和雄土佐民俗選集』一～三巻（高知新聞社）として出版されている。土佐に伝承される豊かな俗信資料をもとに、日本人の心意に迫る論考が収められていて読み返すたびに興奮を覚える。私自身が俗信に関心を持つようになったのも、若いころに恩師の坂本正夫先生について桂井先生のご自宅に伺ったのがきっかけである。

桂井の俗信研究には、怪異や妖怪を扱ったものがいくつもある。たとえば、「妖怪の本性」（桂井和雄土佐民俗選集「巻一」と題した論考では、山中や海上などで怪

異現象に遭遇したとき、それを妖怪変化のしわざと見なして相手の正体を見破る呪的な方法について述べている。土佐郡土佐山村（現高知市）では、古く狩猟に火縄銃を使っていた時代、山で妖怪に出会った時には、スリワリと称する銃の照尺の小穴からのぞくと相手の本性がわかるといわれていたという。桂井が報告したこの俗信が現在も伝承されているのを数年前に知った。香美郡物部村（現、香美市）で最長老の猟師である萩野雄三さん（一九二四年生まれ）たちの鹿猟について行ったときのことである。猟の合い間に、山の民俗を聞かせてもらったのだが、私

して、萩野さんは「山中で得体のしれないものに出会ったときや、なにか怪しいと感じたときには銃の照門についている小さな穴からのぞくと魔物の正体がわかる」と話された。現在の銃にはこの穴はないそうだが、この方法は土佐山村のやり方と同じである。
桂井は、吾川郡吾北村津賀ノ谷（現、いの町）では、山で妖怪に出会った時に、筒袖の木綿着物のわきの下にあたる部分の穴からのぞくと、その本性を見ることができるとの伝承を紹介している。この俗信についても、やはり物部村の伊井阿良芳氏（一九二四年生まれ）から「筒袖の開いたところから見ると魔物の正体がわかる」と教えてもらった。また、須崎市浦ノ内では沖漁に出ている不思議なことに出会った時には、「早緒の小口からのぞくと、魔物の本性がわかる」という（「妖怪の本性」）。いずれも、小さな穴からのぞき見ることによって怪しいものの正体を見破る呪いといつてよい。妖怪の類はその本性が露見したとたんに人間をたぶらかす力を失うのである。
私は小学生時代を東津野村（現、津野町）で過ごした。家のすぐ前

を四万十川が流れていて、よく魚とりに行ったが、祖母から「ひとりで川に行ったらエンコウに引っぱられるけ、行かれん」と注意されたものである。伯父からは、ときどきシバテンと相撲を取った男の話や、夜道を歩いているとチツチツと鳴きながらついてくるタモトスズメの怪異を聞かされた。子ども心に怖かったのはヒダマで、夜など、「どこそこヒダマがでた」などという話を耳にしたときは、庭先の便所に行くのをためらったものである。

ヒダマ（火魂）の伝承は各地にあるが高知にも多い。江戸時代に作られた「土佐お化け草紙」（堀見忠司氏蔵）には、鬼火について



鬼火（ケチビ）【『土佐化物絵本』個人蔵】

て「是ハ薊野の法経堂と云処に出づ。此火を呼ばば、呼びたる人の屋根の棟にきたり、燃ゆるなり。われ此火を見たること毎度なり。みる人疑うことなけれ。おそろしや〜〜」と説明があり、口から真っ赤な火を吐きながら飛ぶ首が描かれている。ケチビはヒダマとかヒトダマなどと呼ばれる怪火の一種である。かつて、薊野（高知市）の法経堂にケチビがでるとの話は知らぬ者がないといつてよいほど有名だったようだ。明治初期の「土佐化物絵本」上にも、法経堂のケチビの悪口を言つてひどい目にあつた話が紹介されている。大正十四年（一九二五年）発行の寺石正路編『土佐風俗と伝説』にも「法華経堂の怪火」と題して数話でている。そこには「高知城下には、北方一里の法華経堂の火、俗に怪火と称せられて有名であつたことは、薊野村より久礼野重倉に越す坂道で、昔一飛脚此所を通るとき、大事の手紙を落し悔やみて自殺し、遊魂火となりて之を探すなりといひ伝へられ」と、手紙を紛失した飛脚の亡魂だと説明している。

「土佐お化け草紙」によれば、ケチビを呼ぶとその人の屋根の棟

に来て燃えるという。その方法について『土佐風俗と伝説』では、草履の裏に唾を吐きかけて呼ぶとも言うようで、南国市国府地区でも、草履の裏に唾を吐いて招くと一直線に近くまで飛んでくるといわれていた。この行為について『改定総合日本民俗語彙』（平凡社）では「もとは人の無礼を許さぬという意味であつたらしい」と解説している。確かに無礼な態度にはちがいないが、ただ、ケチビを挑発するというだけでなく、あの世のものとの交信する呪的な意味がこの行為には隠されているような気がする。

※お知らせ

七月二十七日（土）午後二時から、「土佐の俗信と妖怪」ことばとしぐさの文化学」と題した公開講演と対談を高知県立大学で開催します。入場無料。ぜひご参加ください。



つねみつ とおる

一九四八年 中土佐町久礼生まれ
國學院大学卒業後、都内の公立
中学校教員を経て、現在、総合
研究大学院大学教授・国立歴史
民俗博物館教授、博士（民俗学）
著書に『学校の怪談』『しぐさ
の民俗学』など。

山のじじい

John Moore

「世の中が不況のときは、田舎に住むのが一番。世の中の景気がいいときも、田舎に住むのが一番。」

これは私の祖父が、私が六歳のときに言った言葉です。と記憶に残っていた。私の祖父は生涯、質素でまっすぐな生き方を貫いた。家に電話も引かず、俺と話したければ、戸はいつも開いている、とよく言っていた。車も持たず、いつもバスを使った。掃除機も、ほうきは静かだし、これで十分だと言っていた。月明かりの下で種を蒔き、生涯一日も休まなかった。

私は最近になって、祖父の言葉の意味が分かるようになった。今、都市での生活は大変だ。皆イライラして、仕事もお金も生きている実感もない。大都市生活のバブルははじけ、銀行の多くは倒

ればならない。また、五十年間にわたる化学肥料中心の農業によって痛んだ田舎の土壌を再生していくかなければならない。たかさんの畑や田んぼが十年、二十年と手つかずに放置され続けている。おばあちゃん、おじいちゃんたちは疲れている。だからこそ、今、「本物の食べ物を育てる」というこの素晴らしい仕事を引き継いでいく若い血が必要だ。これは天国に最も近い仕事、特にこの素晴らしい山中においてはなおさらだ。

もつと土まみれになれ！それが私たちの魂が一番喜ぶこと。私たちは母なる大地、私たち自身、私たちのルーツ、私たちの食べ物を育てることからあまりにも遠く離れてしまった。ハンドルひとひねりで、かつて畑の土に還していた、養分いっぱい肥やしを水に流してしまおう。もし人生に迷いを感じたら、土の上に座り、指で土を掘り返したり、手を土で洗ってみたりしたらいい。そして土に触れたときの手の感覚に気付いて欲しい。身体は土に触れることが大好きだ。私たちは忙しすぎて、こんなに簡単なことを忘れてしまった。白いシャツ、新築のマンション、便利な食べ物に囲まれて「清潔」になりすぎてしまった。花を植え、畑を始めよう。もつと土に触れよう。もつと土に触れよう。もつと触れられるように。土は私たちのいのちの根、土は未来の種。山は森を、海を、そしてその間にあるすべてのいのちをつくる。

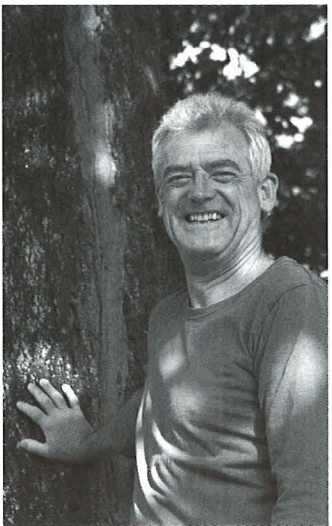


私たちは毎日、

産寸前だ。その点、田舎暮らしは最高だ。食べ物も家賃も安く、山に入ればただで楽しんで、ストレスも少ない。人も生活も、本物だ。都市での生活が快適な時、つまりお金もたくさんあって、よく働いてよくお金を使って、大きい夢を持ち、他人の夢まで抱えている時、自分の時間や自分の夢のため時間はほとんどない。それならやはり、田舎に暮らすのがいい。お金の行き先はより広がるし、自分の本当の夢を持つことができる。私は三年前、高知の山間部に移住した。自分にもつと合った田舎を探して、十年間、日本中を探し歩いた。私は自然な山、生きた本物の土、そしてその土地の植物や食べ物が好きだ。高知にはそれがすべてあった。全国の野生の花や植物の六十五%が高知に植生している。まさに自然のDNAバン

クだ。さらに山奥に行くと、古代のDNAを持つ在来種が今も生きていて、おばあちゃんおじいちゃんの手で連綿と植え付けられている。私たちがシーズ・オブ・ライフ（※）のシードバンクとシードライブラリーを高知県仁淀川町に開設したのも、このためだ。ここには、本物の日本の食べ物の育て方と作り方のノウハウが豊富にある。成長のために化学毒物が必要とする米国輸入のF1種ではなく、本物の味噌や豆腐ができる、本物の大豆がある。本物の種、本物の食べ物こそが、本物の文化、本物の生活様式をつくる。地域のお祭りもともと、その土地の農作物の種蒔きや成長の周期から生まれたものだ。それぞれの土地の歌、踊り、言葉、料理が何百年にもわたって受け継がれている。そこにお金は一切介在

山のように考え、葉っぱのように生きようと努めている。そうできるときもある。できないときもある。でも大切なのは目指す目標を持つことだ。それが明日をつくる。よりよい山の明日をつくる。その山の水が、川へ、町へ、海へと流れていく。山が海をつくり、海が山をつくる。山にいと、私たちの行動一つひとつを、日々はつきり認識することができ。私たちの行動こそが、子どもたちの未来をつくる。山は、何万年もそこに存在し続けている。山は私たちが生涯かけてもとうてい学び得ないことを知っている。山とともに座って、そのころに耳を傾けてみて欲しい。あなたに助けを求める声が聴こえてくるかもしれない。週末だけでも、または一週間、一ヶ月だけでも、毎日一時間、山とともに座ってみたらいい。きつとまったく新しい人間に生まれ変わるだろう。その経験はあなたのこのころの中に永遠に生き続ける。そして山のこのころの中にも、あなたは永遠に生き続けるだろう。



（※）一般社団法人シーズ・オブ・ライフとは、日本の真の財産、遺産である種を育むために二〇一二年七月に設立。世界規模の危機への認識を一般に広げるため、教育やプログラム、イベントやコミュニケーションを企画。また生命の種が幾世代にも渡って日本を確実に育てるよう、個人や組織から支援を集めている。

ジョン・ムーア

一九五一年、アイルランド生まれ。ロンドンで教師、自転車雑誌の編集などをした後、ニューヨークでコピーライターに。電通を経てパタゴニア日本支社長に転じる。退職後、高知県に移り住み一般社団法人シーズ・オブ・ライフを設立。

<http://www.seedsol.org/>

ニューヨークで個展を経験して

岡本 明才

写真を三十歳頃から始め、今年で十年目になります。高知や東京などで作品を発表していますが、少し変わった作品制作をしているので、いつかは海外で発表できたらと思っていたら、トントン拍子で、ニューヨークの個展開催が決まりました。ことの発端は、映像作家の中岡りえさんとの出会いです。彼女とは、私が企画している沢田マンシオン祭り作品を出展した時からの付き合いで、ニューヨーク在住の彼女は、私の作品を見るなりニューヨークでもこのような作品を見たことないと評価してくれました。中岡さんが高知に里帰りして帰国するたびに情報交換をしていたのですが、昨年の五月頃にニューヨークで個展をしないかと話があり、気楽に承諾した

のが始まりです。昨年の十月にニューヨークのイセギャラリーに企画書を送り、採用され個展開催が決まりました。

イセギャラリーではキュレーターが展覧会の企画や作家の管理、また宣伝活動から雑用まで何でもこなし、作家は制作に集中できます。高知のギャラリーではないシステムです。キュレーターは中岡さんがやってくれ、開催は二〇一三年五月三日〜六月一日に決まりました。しかし二月には、高知で個展を控えていたので、とりあえずそちらの制作に取りかかり、ニューヨークの準備は終わってからでいいかと能天気と考えていました。

個展も終わり、制作に取りかかろうとしたら、中岡さんから、ア

ーティストステートメントを作りなさいと指令が入ります。高知ではあまりなじみの無いこの言葉、簡単にいうと作家の考え方を文章にした物。作品を見てもらえば、文章なんて無くとも思いますが、ニューヨークではこれが無いとダメだそうです。子供の頃から作文コンプレックスなので、この作業が本当に辛く、書いてはメールで中岡さんに見てもらい、ダメだしで書き直しを何度もするはめに。展示に関しても、会場が十四mもあるのに、新作だけで空間を埋めるには作品が少なく、中岡さんと相談しながら、今までの作品をまとめて展示する事になりました。開催一ヶ月前にもなるとスカイプで中岡さんと打ち合わせの日々。時差があるためアメリカは昼間で

も高知は夜中なので、寝不足が続きます。

案内状のデザインでは、タイトルを大きくし、名前を少し控えめな感じでレイアウトしたのですが、アメリカではとにかく名前を大きくした方がいいそうで、自分を全面に押し出さないと、自信が無いと思われるそうです。文化の違いを感じました。

経歴は、日本では上から古い順ですが、アメリカは新しい順とか、デザインも単純で分かりやすくして、フォントを多用しない方がよいなど、印刷物でもダメだしだらけで、印刷が間に合わないのではないかとヒヤヒヤものでした。

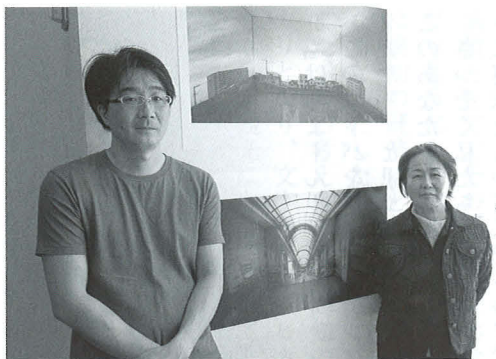
個展二週間前には、睡眠時間がほとんど少なくなり、慢性寝不足でした。ニューヨークに行くまでに身体を壊さないよう栄養ドリンクだよりの生活に。

作品と印刷物が仕上がったのが搬入の六日前、EMSという海外用速達ゆうパックみたいなやつで送るのですが、早くて五日かかり、ギリギリだったので発送費が恐ろしい事になっていました。

展示プランもだいたい決まり、やっと休めるようになったと思いきや、中岡さんの夜更かしスカイ

プで、相変わらずの寝不足。話す内容は、ニューヨークで個展をしたからって天狗になったらだめとか、とにかく謙虚でないさいとか、人と仲良くならないなど、作家としてどうあるべきかを熱く語られ、人生の先輩の言葉を噛み締めました。

とうとう出発の日、友人二人がお手伝いにニューヨークまで同行してくれました。遠方で展覧会をするときは、興奮していつも眠れないのですが、初めての飛行機の長旅は、食事が出る、映画は見放題、違う意味で興奮し十二時間のフライトで眠る事が出来ず、JF



筆者(左)と中岡りえさん(右)

K空港に到着。休む間もなく、現地の中岡さんと宿で合流し、さまざま映像作家のパーティーに参加して、宣伝活動。しかし自分は全く英語が出来ないので。英語の出来る友人が通訳してくれましたが、やはり自らの言葉で喋らないと思ひ、土佐弁まじりの片言英語で一生懸命喋っていたら、フレンドリーに相手をしてくれ、英語の手ほどきまでしてくれました。全然ビビる必要がないし、何とかなるってことを実感。パーティーも終わり宿に帰り着いたら夜中、実際二十四時間近く起きている状態、翌日の搬入が心配です。

なんとか七時に目覚め早めにギャラリーに到着。いよいよ搬入展示プランも出来ているので、早めに終わらし、遊びにしようと思っていました。午前中はテンションも上がり要領よく進みますが、昼食をとってからが大変で、友人は立ったまま寝ているし、もう一人はあきらかに不機嫌。自分もフラフラしながらの作業で、効率が悪くその日に搬入が終わりませんでした。

次の日がオープンニングパ



ニューヨークでの個展

ティーなので、早めに入りな

か間に合わせパーティーを開始。人が来るのか不安でしたが、たくさんのお客さんが来て、たくさんの人と交流し、「こんな写真は見たこと無い」とか、「コンセプトが斬新だ」とからだ全体で喜びや楽しさを表現する姿が、うれしかったです。撮影行為を評価してくれる人が多く日本との違いを凄く感じました。

それに英語は思った事をストレートに表現するので、気持ちがいいです。

帰国後、ニューヨークの個展で自分は何を感じどう変化したかを

考えたとき、ニューヨークだから特別ではない、作品発表するところはどんな場所でも同じなのだ、確認できました。ただ知らない場所が発表することは、新たな出会いがあるという事、そして人と出会う事で自分の作品に何らかの影響があるという事です。自分自身ニューヨーク人たちと出会い新しい作品のアイデアが生まれました。新しい価値を生み出すには新たな挑戦が必要だと確信しました。そして時差のせいで、早寝早起き優良生活になったのも大きな変化です。

おかもと めいさい

一九七一年 高知市生まれ
写真家、沢田マンシオンギャラ
リ room 38 代表。

84プロジェクトの取り組み

川村 聡志

「はちよーん！」

このコトバを見て、「ナンノコッチャ?」と思ってくださったそのあなた!

さっそく私たち84プロジェクトに興味をもってくださって、どうもありがとうございます! その「ナンノコッチャ?」を「ナルホド!」に変えられるよう、これから私たちの活動、そして想いをお伝えしたいと思います。

まず、私たちの旗印となっている数字「84はちよん」。(はちじゅうよんと書いてはちよんと読んでくださいね!) これはなんの数字かご存知ですか? これ、実は高知県の森林率なのです。海なし県・岐阜の81%を超えて、実は高知県はニッポンイチの森林率をほこる森の国! なんですすよ!

ここでみなさんに少し考えていただきたいのですが、この森林率84%という数字をみなさんはどう

捉えますか?

高知県の84%を占める森。経済活動というモノサシでこの森を見た時に、今まではマイナスとして捉えられてきました。

ユタカナ森はモノの流通に不便であり、生産可能な土地は限られ、そんな森でなんとか生産可能な木材も外国産材に押されて価格は低下し、それに連れて森の価値はどんどん下がっていききました。

そんな状況のなかでこんな声が

「高知には山しかない。だから、この言葉の後はさらにマイナスな言葉が続きます。」

さて、ここでもういちどみなさんにお聞きしたい。

高知県の森林率84%。これは「山しかない。」というマイナスの数字なのでしょうか? 本当に?

高知には美味しい食べ物がたくさんあります。野菜も、お肉も、

シカ料理は「84ジビエ」、高知で水揚げされたカツオは「84カツオ」など。

高知で生まれ育てられてきたモノ、そして加工されたモノもろもろに「84」というデザインをはつつけていく。それによって、「84」という数字に触れるチャンネルを増やしていき、「高知にはなんでもこんな84という数字があふれているんだらう?」という状況をつくりまします。

そうして「ナンノコッチャ?」と思ってくれたならこっちのものと高知はユタカナ森があることを誇りに思っているというアイデンティティが伝わり、それは価格が高い低いではない、高知にしかない価値として、その考え方にお金を払うようになります。また、これは高知の経済にとってもプラスになるとわたしたちは考えています。また、この考え方こそ、高知のヒカリとなり、文字通りの「ヒカリをみる」観光にもつながってくるはずです。

84プロジェクトではこの考え方に共感してくれた事業者の方に「84」というロゴをつけてもらい、その売上の一部を協賛していただくことで活動しています。現

お魚も、それにお酒も。

みなさんも日々、その恩恵に預かっていることと思います。

これらのルーツをたどると、命を育むユタカナ川があるからであり、その源は高知の84%を占める森なのです。

むしろ「山がある!」からこそ高知はユタカだと言えるのではないのでしょうか?

私たち84プロジェクトが目指す社会はここにあります。

想像してみてください。高知県の84%を占めるこの森を「山しかない。」とマイナスの象徴として捉えるのではなく、「山がある!」と誇りに思い、山があるから高知はユタカだと思おう社会。そして、その山に感謝をこめてお返しをしていく社会。なんだかとお返しもタシそうだと思いませんか?

そんな社会を「84」というコミュニケーションツールによって

在では、十三の企業・団体がそれぞれの考える「84」を実践してくれています。

ここで「ただ『84』というロゴをつけるだけでしょ?」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、違うのです! 「84」とタノシク、プラスに捉えることによって、今までただの森であったものに新たな価値を生み出すことも「84」という考え方による効果です。

たとえば、高知の森をプラスに捉え直してみたら??

一つには、森は巨大な二酸化炭素の吸収マシンといえます。

そうして生まれたのが環境教材「CO2のカンヅメ」。杉の間伐材を磨き上げ、そこに二酸化炭素の循環サイクルなどについてわかりやすく解説したシールを貼っただけの商品ですが、これほどわかりやすく二酸化炭素について体感的にわかる教材はありません。

一つには、森は香りであるといえます。

製材所でできた端材にヒノキから抽出される香り成分を染み込ませ、それをお風呂場におけばユニットバスもひのき風呂に変わります。それが「84ひのき風呂」。



「84ひのき風呂」になるひのきの香り板



CO2のカンヅメ

さらに言えば、植物に対する知識や知恵を解説する人さえいれば、森はまるごと植物園に変わります。そのプロトタイプとして南国市篠原にできているのが「84ガーデンガーデン」。

他にもたくさんありますが、このように「はちよーん!」と高知の森をプラスに捉えることによって、森にあらたな価値が生まれてきています。そして、これからもドンドンと生まれてくるでしょう。そうやって森に新しい価値を生みながら、森をタノシクするプロジェクト。それが84プロジェクト。

実現しようとしているのが84プロジェクトなのです。では、どうやってそれを達成するのか? ということですが、それではこれから肝心の活動内容についてお話しします。

さきほど「84」というコミュニケーションツールで実現すると書きましたが、わたしたちはこの「ナンノコッチャ?」を生み出す「84」という数字を高知県内のあらゆるモノ・コトにつけていくことによって、実現しようとしています。



84ガーデンガーデン

クトです。

さてさてみなさんの「ナンノコッチャ?」を少しでも「ナルホド!」に変えられていたら幸いです。もし、まだまだ「ナンノコッチャ?」と思われる方は、ぜひぜひ84プロジェクトまでご連絡ください。どうもありがとうございます!

かわむら さとし

一九九〇年 香南市生まれ
農家の息子として生まれる。実家の農業の手伝いをする中で、自然、特に森林についての興味を持ち、高知大学農学部森林科学コースへ進む。学業の傍ら林業家や農家の現場を訪れ、高知県の農山村を取り巻く状況を見守りたいと決意し、大学を二年休学。特定非営利活動法人NPO 84プロジェクトの事務局として働きながら、足元をプラスに見つめなおすことで新しい価値を生み出す方法論を学ぶ。現在は復学し、実家という足元を見つめなおすことから次の道をさがしている途中。

「レ・ミゼラブル」のなぞ

ミュージカル映画「レ・ミゼラブル」が評判を呼んだ。私も見て感動した。素晴らしい映画だ。しかし原作には及ばないと感じた。主人公のジャン・バルジャンがミリエル司教と出会って人間的な変革をとげる「銀の食器・銀の燭台」の名場面が、物足りないのである。

私がそう感じるのには、三十年以上前に出会ったある教育書の影響がある。大西忠治著「国語授業と集団の指導（明治図書・一九七〇年初版）」である。「レ・ミゼラブル」（ユーゴー作）の一節が取り上げられ、衝撃的な「教材分析」がなされている。この本を私は十回以上読み返したが、ジャン・バルジャンが銀の食器を盗む箇所分析は、ぼろぼろになるまで読みこんだ。私の授業は、この本から大きな影響を受けている。

一時期（私の中学時代もそうだったが）「レ・ミゼラブル」の一節——「銀の燭台」の場面——が中学校の国語教科書に載っていた。「レ・ミゼラブル」は、「教材」だったの

である。大西忠治氏（執筆当時は香川県中学教師だった）が、著書の中で取り上げたのは以下の部分である。

一切れのパンを盗んだために十九年ものあいだ投獄され、人を憎んで生きてきたジャン・バルジャンは、ミリエル司教と出会って感動する。旅館や民家で冷たく宿泊を拒否されたジャン・バルジャンをミリエル司教はあたたかく迎え入れてくれたからだ。けれどその夜ジャン・バルジャンは、ミリエル司教の部屋へしのび入る。「猫のように……こっそり」と彼は再び盗みを犯そうとした。だが、月明かりの中で自分を信じきって眠っているミリエル司教の寝顔を見たとき、彼の心に動揺が広がった。その場面が次である。

かれの目は、老人から離れなかった。その態度と表情に、はつきり現われていたものは、ただ奇妙な不決断だけであった。身を滅ぼす

深淵（しんえん）と、身を救う深淵と、二つの深淵の間で、ためらっているようだった。この頭を打ち破るか、この手に接吻するか、どちらかをするつもりかのようにだった。（佐藤朔訳）

このあと、ジャン・バルジャンは、ゆっくりと帽子をぬいで、司教に敬意を表す。ところが次の瞬間髪を逆立てる。そして戸棚の方へまっすぐに歩いてゆき、銀の食器を取り出し、足音も気にせず闇の中へ消えてゆく。

ここに、「なぞ」がある。ジャン・バルジャンは、一旦は盗みを断念した。明らかにそう読める。ところが次の瞬間髪の毛を逆立てて犯行に踏みこむ。この変化はなぜ起こったのか。一体彼の心の中に何が生じたのか。その心理を解明したのが大西忠治氏の教材分析である。

「身を救う深淵」という奇妙な言葉がキーになる。「身を滅ぼす深淵」の方は、わかる。悪を犯すことで救いのない世界へ落ちてしまふことを意味している。だが、「身を救う深淵」とはどういうことだろう。

大西氏はこう述べる。「彼は、善を見たことがなかった。人間の中に悪を見てくらし、悪に

ルジャンは銀の食器と銀の燭台によってもてなされ、感激するのである。そして銀の燭台はミリエル司教の手からジャン・バルジャンに手渡される。寝室に案内されたあと、彼はその燭台を枕元に置いて眠りにつく。銀の燭台を盗むことは、銀の食器を盗むよりも容易だったはずだ。ミリエル司教に見つかるとおそれなしに盗むことができるからだ。だが、ジャン・バルジャンは銀の燭台には見向きもしない。これはなぜなのか。

以下、（大西忠治氏の読みを踏まえた上での）私見である。ジャン・バルジャンの心理は、「アイデンティティー危機」という言葉で説明できる。自分を信じ切つて眠っているミリエル司教の寝顔を見たとき、ジャン・バルジャンの心には、その信頼に応えたいという思いが湧き上がった。ところが次の瞬間、彼は目のくらむような恐怖を感じる。もしここで司教の信頼に答えて善の道に踏み出したなら、人を憎むことで生きてきた獄中で十九年の人生は一体何だったのか……ということになる。「憎悪の人生」の意味が失われる。それは彼にとって恐ろしいことだった。彼は、劇的なアイデンティティー危機に直

面したのだ。盗みを犯して再び投獄されるよりも、この危機と向き合う方が恐ろしいことだった。彼はこの危機と向き合うことを回避するため——つまり自分が悪人であることをミリエル司教と自分自身に対して証明するために——銀の食器を盗んだのである。

アイデンティティー危機は、ジャン・バルジャンがミリエル司教と出会ったときからさざざしていた。ミリエル司教の温かいもてなしに、ジャン・バルジャンは感激しながらも激しく動揺する。彼の人間観——人間は信じられないものだという人間観——がゆらいだからである。無意識のうちに、この動揺に決着をつけようとして、ジャン・バルジャンは司教の部屋へしのび入った。「銀の燭台」のことは、彼の頭からぬけ落ちていた。「銀の食器」は、司教の枕元の戸棚にしまわれていた。それが、ミリエル司教の枕元にあるということが重要だった。ミリエル司教の存在ぬきには、ジャン・バルジャンの「犯行」の意味は失われる。ジャン・バルジャンが無意識にめざしていたのは、ミリエル司教の信頼を明確に裏切ることだったのだ。

ところが、司教があまりにもやすらかに眠っていたため、その信頼を裏切ることができず、ジャン・

慣れて生きて、だからこそ善は未知なものであった。未知なものがあるがゆえに恐怖をさそう深淵に見えたのである。つまり彼は善へひきこまれそうになることに恐怖したのである。……ジャンは、悪をなそうとしたのではなく、善の恐怖からにげようとしたと思われるのである。善へ自分をひきこもうとする恐ろしいものに反抗して盗みをしようとしたと考えられる。」（国語授業と集団の指導）」この読みは衝撃的だった。小説がここまで深く読めるということに私は驚いた。目の覚める思いだった。

実はこの分析を読んだとき、私の子供時代からいっていた疑問が氷解したのである。それを紹介したい。「ああ無情」と訳されていた児童書の「レ・ミゼラブル」を読んだのは小学校時代だった。物語には深く感動したが、素朴な疑問が残った。

ジャン・バルジャンは、なぜ銀の食器だけを盗み、銀の燭台は盗まなかったのかということである。ミリエル司教は質素な暮らしをおくっていたが、銀の食器と（二本の）銀の燭台だけは、客をもてなすためのささやかな贅沢として大切にしていた。実際ジャン・バ

ル司教の部屋にしのび入ったとき、彼の手には「鉄の燭台」（「カンテラの鉄の柄」とも訳されている）がにぎりしめられていた。これは彼が服役労働中に石切場で手に入れたもので、岩盤に突き刺して固定することもできる恐るべき凶器だった。

「レ・ミゼラブル」は長大な物語だが、「燭台」の象徴性に注目すると短くまとめられる。

ミリエル司教から「銀の燭台」を与えられた衝撃によつて「鉄の燭台」を捨てたジャン・バルジャンが、「銀の燭台」の火に見守られつつ最期をむかえるまでの壮大な物語。私見では、これが「レ・ミゼラブル」のシンブルな物語構造である。

では、「銀の食器」は一体何だったのだろう。ジャン・バルジャンが「銀の食器」を盗まなければ「銀の燭台」は彼のものにならなかった。「銀の食器」は「銀の燭台」を彼に届けるための、物語上の巧妙な仕掛けだったのである。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

四月十九日、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにおいて、ワールドミュージックナイトVol.13を開催しました。

この公演は市民組織「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」と協働で開催しているコンサートシリーズで、世界の音楽と食べ物を一度に楽しめるというコンセプトで行っています。

今回のテーマは「ヨーロッパ」。アイリッシュやクレズマー、ジプシーなどの民族音楽や、フランスのミューゼットなどの大衆音楽も奏でるアコースティックトリオ「ザツハトルテ」をメインアクトに、高知からはフランス音楽を演奏する「クロパン・クロボン」の演奏をお届けしました。

まずは開演前、満員のお客様で賑わうロビーに、アコーディオンを弾くトラ、しまたろうと、シヨルダーカホン（パーカッション）をかっただパンダ、パンダロンが現れて、演奏しながらステージに行進します。ステージ前で歌のみゆきおねえさんも一緒にダンスと楽しい演奏を披露し、会場を温めて本番スタートとなりました。まずはクロパン・クロボンの演奏。アコーディオン、バンジュー、



ザツハトルテ

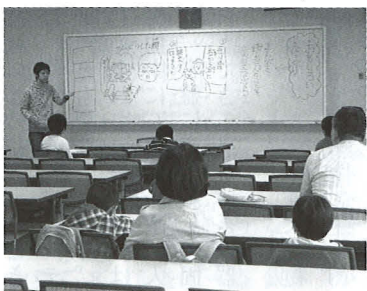
そしてトイピアノや見たこともないさまざまな楽器を使って届けられる演奏は、少しおしゃれで、そして気持ちよい空気運んでくれました。そしてメインアクトのザツハトルテは、チェロ、ギター、アコーディオンという独特の編成ながらも濃厚で、そしてエネルギーあふれる演奏です。年間百本以上のライブを行っているというのうなずけます。また曲間のお話では演奏からは考えられないトークで爆笑を誘い、さらには手品も披露するサーピス精神溢れるパフォーマンスで会場を盛り上げてくれました。本編後半では、NHKみんなのうたで取り上げられ大ヒットとなった「ドコノコノキノコ」も演奏し、小さなお子さんはじめ、お客様から大喝采を浴びていました。（入場者数・二百名）

「村岡センセイと4コマまんがをはじめよう!!」「ドクター正木のまんがラボ市展版」

市展では初めての試みとなる「まんが」の講習会を四月二十日・二十一日の両日高知市文化プラザかるぽーと中央公民館で、大人と子ども向けの二コースを同時に開催しました。

小・中学生が対象の「村岡先生と4コマまんがをはじめよう!!」はまんがに興味一杯の子どもたちが集まりました。村岡先生から面白い4コマまんがを描くためのコツを教わったあとは、それぞれの作品にチャレンジ!次から次にアイデアを出す子、一つのネタをじっくりと練り上げる子など、思い思いに紙に向かいます。本番の紙に綺麗に清書されたみんなの作品は「村岡先生が「ここが面白いね」「こうやったらもっといいんじゃないかな?」といった解説を加えながら、参加者全員に披露されました。

一方、「ドクター正木のまんがラボ市展版」では、高校生も含む参加者それぞれが好きに描いたイラストにアドバイスをもらおうと、ころから始まりました。最初は緊張していた参加者も、正木先生の丁寧なアドバイスに「こういった動きの時の身体のバランスは?」「道具を使った動きを上手く出すにはどうしたらいい?」など熱心な質問が飛び出していました。（受講者数・二十九名）



●第65回高知市展 先端美術研究会●

やなぎみわ講演会

「やなぎみわ一九八八〜二〇一三 工芸・写真・演劇」

高知市展の先端美術部会では、二年に一度、現代美術作家の講演会を開催しています。

本年度は、日本のみならず世界で評価されている現代美術家で京都造形芸術大学教授のやなぎみわ氏の講演会を、第65回高知市展先端美術部門の研究会として五月二十六日（日）に高知市文化プラザかるぽーとで開催しました。

講演会は京都市立芸術大学時代の伝統工芸にはじまり、写真、そして現在の演劇にいたるまでのやなぎ氏の活動の変遷、そして現在力を注いでいる演劇という表現方法についてを、作品の画像・映像を交えて熱く語る二時間となりました。現代アート界の最前線をひた走る作家の講演会とあって、高知県内の美術愛好家だけでなく、演劇関係者なども多く訪れ、やなぎ氏の講演を熱心に聞き入っていました。

講演後の質疑応答では、過去の作品についてや、やなぎ氏のこれからの活動について熱心に質問をする姿が見られました。（入場者数・四十八名）



第65回高知市展 美術体感イベント

「あなたダビンチぼくピカソ」

今年で十二回目を迎える小・中・高校生向けの美術体感イベント「あなたダビンチぼくピカソ」を六月二日（日）に高知市文化プラザかるぽーとで開催しました。

今年度はデザイン部門の「村岡マサヒロ先生と4コマまんがをしよう!」や工芸部門の「カラフルビーズでブレスレットをつくろう!」など、あわせて九部門、十ブースで様々な美術体感が用意され、参加した子どもたちは思い思いの作品に取り組みました。

この日はあいにくの雨天でしたが、パスポートを手に入れた子どもたちは、まずお目当てのブースにダッシュ!屋内や屋外の各ブースでは絵や字を書いたり、粘土をこねたり、初めての石膏にチャレンジする楽しそうな姿を見ることができました。

絵画部門はブラスの他に大階段の横に白や黒の大きな画用紙を用意。普段目にするのが滅多にない大きなキャンパスに、子どもたちは大喜びで、思い思いの絵を描いていました。雨のせいかわりに少し寒い午後でしたが、思いっきりイベントを楽しんだ子どもたちの輝く笑顔を見送りながら、各ブースの指導の先生たちもスタッフも温かい気持ちでイベントを終えました。（参加者数・五百五十五名）



高知市立中央公民館事業
第63回 高知市夏季大学

高知市の夏の風物詩として広く親しまれている高知市夏季大学。

各界の第一線で活躍する多彩な講師陣で、夏の夜を有意義に過ごしてみませんか。

- 期 間 7月25日(木)～8月7日(水)
 [土・日曜日は休講の10日間]
- 時 間 18:30～20:00 (開場18:00)
- 会 場 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
- 受講料 一般3,600円、割引(学生・高齢者等) 2,600円
 ※どちらも10日間通しの料金
 ※7月2日(火)から販売
 当日券900円
 ※各講演日当日、席に余裕がある場合のみ会場
 で販売

お問い合わせ
 高知市文化振興事業団 088-883-5071

風 伯

沈黙の潰瘍

よくして下さい!」といきなり押さえてくれられ、彼は「これ以上どうやって姿勢を良くするのだ!」と心のなかで叫んだという。

「胃と小腸をつなぐ十二指腸に深刻なキズがあります。しかも! それは胃の出口

これはほんとうにあった話である。知人が胃カメラを受けるという。お金を払ってまで病氣を見つけてどうする!と私などはまっぴらだが、頑丈なだけが取り柄のような彼は、奥方の方針に逆らえなかつたようだ。

胃カメラを口から通され、医師の指示に従っておとなしく姿勢を保っているとアシスタントから、「患者さん、姿勢を

結果を見ながら医師は、深刻な表情を浮かべて彼におもむろに告げたというのだ。

「胃と小腸をつなぐ十二指腸に深刻なキズがあります。しかも! それは胃の出口

に当たる幽門の形を醜くユガメルほどの深いキズで、過去に相当深刻な十二指腸潰瘍を患った形跡です」というのだった。

そして、「古いキズのようにですが、いつ頃のものなんですか?」と問われた彼はハタと困った。驚いたのは彼の方である。「そんなことあったかなあ、ちょっと記憶にないのですがねえ」。今度は医者の方が驚いて、「えー! これほどのキズ跡が残っている潰瘍に記憶がないなんてことがあるのかなあ……」。医師は不審そうに彼をマジマジと見つめたのだという。

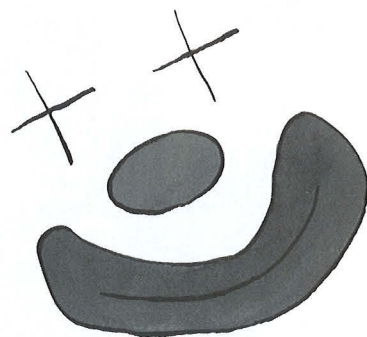
彼から聞かされた話を忠実に再現した。本人が気づかないような十二指腸潰瘍もあるにはあるらしいが、最終的には激痛で気づかされるとか、本人が気づかぬままに治る例はあまりないらしい。

結局、医師は最後までどうしても納得いかない風であったという。

(霖)

こどものためのアートと音楽

3本の手の
 スケルツォ



3本の手がかける魔法…
 絵描きとピアノ弾きが出会ったら…?
 ピアノの生演奏に、
 イタリア人アーティストによる
 ライブペインティングや影絵が加わり、
 イマジネーションがどんどん膨らむ
 遊びの世界。
 大人も子どもも楽しめる、
 愉快的音楽会に参加しませんか?

【構成・演出・出演】ダリオ・モレッティ
 【出演】並河咲耶(ピアノ)
 【演奏曲】バルトーク『子どものために』より

日時: 8月14日(水) 14:00開演(上演時間約40分)
 会場: 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
 料金: 一般(高校生以上) 1,200円
 子ども(3歳~中学生) 500円

■お問い合わせ
 高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「通学路」

中村 衿樺

夏休みも近付き、日は長く、少しだけ蒸し暑い様な雰囲気を表現しました。
 セピア色には「懐かしさ」や「思い出」の意味を込めています。

(なかむら えりか/
 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

田園に遊ぶ

(平成24年7月 南国市J A長岡横の田んぼ)

石川 賢一

「第5回ながおか泥んこスポーツ大会」の一場面です。雨が降ったり、止んだりの空模様の中、引っ張り合っているのは農業用のビニールパイプ。ツルツルなんです。

ほんの少し前まで誰にでも造作できなかったことが、いまはうまくできない。たとえば目玉焼きの卵を割るのに、昔なら子どもでも安心してまかせたものが、いまは大人でもあふない。ポンとひび割れをつくるのに、どの程度当てればいいのか分らず、強く当て過ぎたり、ツメを入れずに親指の腹で強引に押ししたり、左右に引っ張りすぎてぐしゃぐしゃにつぶしてしまったりする。

野菜を茹でる場合も、土より上のものは湯から、下のものは水からというのが常識だったが、それが今ではホウレンソウを茹でるのに水から火にかけてぐしゃぐしゃにする。

基本が欠けているので、応用がきかないといえはそれまでだが、さらにいうと、束ねたままでろくに水洗いもせず茹でるものや、茎と葉を一本ずつちぎって茹でる超繊細派もいるようだ。

こういうことだから、びっくり水」をどんな新商品の水かと勘違いしたり、肉じゃがをつくるの

基層の崩壊



風俗歳時記

貝公昭氏が、北海道から沖縄まで三万五千人以上もの箸の使い方を直接目で確かめて調べた結果である。

些細といえは些細なことだが、このような現象に現れている文化の崩壊が、実は日本文化の根底を大きく崩しやせ細らしているのがある。

(霖)

に、落として「フタ」をするといえは煮立っている肉じゃがの上に、もう一度豚肉を一枚二枚と落としてうまくいったと思うのだ。湯を沸かすのに、鍋にふたをするということすら知らないというのも、取り立てて驚くほどのことでもないのか。

箸の使い方も、正しい使い方を知らないのはなにも子どもたちだけではない。箸の使い方をわが子に指導すべき三十代の親の三人に一人が、持ち方も使い方もまともに出来なくなっているのだ。二十代前半では正しく使えるものが半数以下にまでなっている。これは、箸博士の矢田



リズムはずむ
ココロおどる

重なり響きあう、迫力のボーカルスウィング。→オリジナルアレンジされたリズムが、ステージからあふれて弾む。→
こころ踊る瞬間を、見つけたいなら今日しかない。

8月31日 [土] 18:30開演 (17:30開場) ジャズコアフライブルク ジャパンツアー2013 高知公演

高知市文化プラザ かるぼーと [大ホール] ※1階ロビーで、ドイツビール、軽食を販売します。

入場料(税込)/前売3,000円(当日3,500円) 全席自由 ※未就学児童無料

[チケット販売所] 高知市文化プラザかるぼーとミュージアムショップ 088-883-5052 / 高知大丸プレイガイド 088-825-4335 / 高知大丸プレイガイド 088-825-2191
高知県立県民文化ホール 088-824-5321 / 高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118 / アルテック 088-883-4579 / ローソンチケット(Lコード66594)

